

ラズモフの裏切りとは何か 『西欧の眼の下に』と『社会契約論』 『罪と罰』

押 本 年 眞

序

コンラッド(Joseph Conrad)の小説には、人は生まれ育った土地から遠く離れて、若い日々ひそかに胸中に抱いた自らの将来像とははるかに隔たった人生を送る姿が繰り返し表される。『西欧の眼の下に』(*Under Western Eyes*)の主人公ラズモフもそのような登場人物である。結末部分では、ラズモフ(Kirilo Sidrovitch Razumov)はヴィクトル・ハルディン(Victor Haldin)を裏切り、その後スパイ行為を働いていたこともハルディンの母親と妹のナタリー(Nathalie Haldin)に告白し、ジュネーヴの小ロシア地区を根拠とする自称革命家たちにも告白したのでリンチを受け耳が聞こえなくなるなど不自由な身となり、ロシアの南部において献身的なテクラ(Tekla)という女性に世話をされつつひっそりと生きている。テクラは、社会の貧富の差、不義、不正を憎み、父親が大蔵省の一書記をしていた家を出て以来、自称革命家やフェミニストと称する人物の言行不一致に幻滅した女性であるが、どこにも行き場のない人、希望のない人、みじめな人を助ける人間として生きようとする女性で、ラズモフが無残なリンチにあって以後、敢然として彼を助け、以後ずっと親切に世話をする。

この結末部分では、ラズモフは罪を告白し悔いる日々を送っているという解釈が一般的だが、『西欧の眼の下に』を全体として理解しようとするとき、きわめて基本的な問いに答えることが必要だろう。それは、ラズモフには罪があるのか、あるとすれば、どのような罪なのか、という問いであり、この

問いとのかかわりでこの小説における「裏切り」、「告白」について考察しなければならぬ。

I

『西欧の眼の下に』に関する批評で、もっともよく引用されるのは次のラズモフの自問自答である。

‘Betray. A great word. What is betrayal? They talk of a man betraying his country, his friends, his sweetheart. There must be a moral bond first. All a man can betray is his conscience engaged here; by what bond of common faith, of common conviction, am I obliged to let that fanatical idiot drag me down with him? On the contrary—every obligation of true courage is the other way.’¹

「裏切り」ということが問題となるには、「倫理的絆がまずなければならぬ」とする論である。ところがラズモフにしてみれば、その日、大学から下宿に帰ってみると、圧政を代表する政府高官ド・P氏の暗殺にその朝成功した学生活動家ヴィクトール・ハルディンが助けを求めて潜んでいたことは全く意外な驚きであり、自らの将来にとっては不安で迷惑でしかなかった。彼はハルディンとの間に「共通の信念」、「共通の確信」は無いので助けねばならぬものか疑問を持つ。そして、小説全体は、「逆に 真実の勇気のあらゆる責務はもうひとつの方向にある」という、この引用部分の一応の結論の妥当性を検証していると言えよう。ところで、先の引用箇所は、ハルディンに頼まれて御者のジーマニッチに逃亡を助けるためにある時刻と場所を教えに外出して雪の降る夜に一人歩いているラズモフの想いである。ラズモフはハルディンに対して、その程度の親切心はあった。というよりも、ハルディンが一時的にもせよ自分の下宿に逃れて潜んでいたことが官憲に知られずに済むなら、それにこしたことはなかったのである。ラズモフの行動は保身とエゴイズムに基づいているが、ハルディンには希望を与えたことだろう。

だが、御者のジーマニッチは小汚い酒場でしたたか飲んで厩舎で正体な

く眠りこけていた。その余りにだらしなく、ハルディンの言う「輝かしいロシア民衆の魂」とは遥かに異なる姿をみた時、ラズモフの気持ちは限界点を越えてしまい、激怒して厩舎の熊手の柄が折れるほどジーミアニッチを激しく打つ。

このような落胆と激怒の後、雪の積もった町外れの通りの上にハルディンの幻覚を見てたじろぎながらも、その胸の辺りを靴で踏みつけて通りすぎた後に、先ほど引用したハルディンと自分の間には共通の絆は無いので裏切りではないという自己正当化をし、結局は帝政ロシアの忠実な臣民としてハルディンを官憲に売り渡すことになる行動へと移っていく。だが、注意深く読めば、次のような箇所が続く。

Razumov lingered in the well-lighted street. *He was firmly decided. Indeed, it could hardly be called a decision. He had simply discovered what he had meant to do all along.* And yet he felt the need of some other mind's sanction. (pp. 38-39) [Italics Mine.]

ラズモフはみずからが助かりたいばかりで、ハルディンを助けたいとは実際には少しも思っていなかったと言ってよい。既にラズモフはジーミアニッチを打った後、雪の上を歩きながら、自分のベッドの上に横たわっているであろうハルディンを想像して激しい嫌悪感をおぼえながら、「下宿に帰ったらあいつを殺そう……」(32頁)と独り言をつぶやく。「彼がずっと意図していたことをただ発見した」後は、一気に権力へ近づく行動をとる。普段は、父親であることが世間に伏せてあるK-公爵(Prince K-)の許へ行き、そこからの紹介で帝政ロシアの官僚制のひとつの頂点に立つT-将軍(General T-)に会いに行く。

T-将軍には、父のK-公爵から愛国心のある感心な青年として紹介されたであろうラズモフは、一時的にせよハルディンの逃亡を助けようとジーミアニッチを酒場へ探しに行った件は秘しておこうと、時間的に辻褄を合わせた嘘をつく。しかし、将軍は政府高官暗殺の容疑者が「何の理由もなしに」ラズモフの下宿へ逃れたのは不思議だと鋭く突いて来る。ラズモフは、この疑

念に対し両足の下の床が抜けたかのような激しい不安感を覚えながらも、逃亡計画の情報を提供することによって切り抜ける。下宿に戻ったラズモフはジーミアニッチと十分に連絡がとれているふりをしてハルディンを送り出し彼が官憲の手によって捕らえられるのを望む。

『西欧の眼の下に』を注意深く読めば、ラズモフの裏切りは明白である。それにもかかわらず、政情不安を感じつつも活動家の学生に対し心理的距離を置いて、将来に備えて勤勉に学業生活を送っていたラズモフが、無知な大酒飲みの貧農と夢想家と言ってよい学生活動家の陶醉に挟まれて自己の生活が壊されていくことに腹立たしさを覚える心情に共感を誘う工夫がなされている。そのひとつには、コンラッドのこの小説中の時間の操作が非常に巧みであるために、ラズモフがある時点からは帝政ロシア官憲のスパイであることがなかなか明らかにされないことも関係している。

II

ラズモフの裏切りには一種のおぞましさがあるが、「共通の絆が無ければ裏切りではない」とする彼の自己正当化が妥当性を帯びているように感じられる時もある。小説中の時間の操作以外に、このような印象を与えるのはなぜだろうか。裏切りではないとする立場だったラズモフがハルディンの妹ナタリーに、はっきりと裏切りを告白する手紙の中で述べている次の部分を考察したい。

Suddenly you stood before me! You alone in the world to whom I must confess. You fascinated me—you have freed me from the blindness of anger and hate—the truth shining in you drew the truth out of me. Now I have done it; and as I wrote here, I am in the depth of anguish, but there is air to breathe at least—air! *In giving Victor Haldin up, it was myself, after all, whom I betrayed most basely.* You must believe what I say now, you can't refuse to believe this. Most basely. It is through you that I came to feel this so deeply. After all, it is they and not I who have the strength of invisible powers. So be it. *Only don't be deceived, Natalia Victorovna, I am not*

converted. (p. 361) [Italics Mine]

「ヴィクトール・ハルディンを裏切ったときに、私が最も卑劣に裏切ったのは、結局、私自身だったのです」とは一体どのような意味なのか。ラズモフは決してハルディンの思想、価値観に共鳴するようになったわけではないことは、引用の最後の「ただ、誤解しないで下さい、ナターリア・ヴィクトロヴナ、私は転向したわけではありませんから」にうかがわれる。この点に注意しながら、ラズモフのとった行動がどのような意味で裏切りかを考えてみたい。事件の翌日のラズモフは次のようである。

He went out and attended three lectures in the morning. But the work in the library was a mere dumb show of research. He sat with many volumes open before him trying to make notes and extracts. His new tranquillity was like a flimsy garment, and seemed to float at the mercy of a casual word. *Betrayal! Why! the fellow had done all that was necessary to betray himself. Precious little had been needed to deceive him. 'I have said no word to him that was not strictly true. Not one word,' Razumov argued with himself.*

(p. 71) [Italics Mine]

ラズモフは動揺しながら、「あの男は、自分自身を裏切るのに必要なことは全て彼自らがやったのではないか。あの男を欺くために必要なことは、ほとんど何もなかった」と自分へ言い聞かせる。だが、ラズモフには罪意識は残る。ベアトウー (Jacques Berthoud) は、それは何故であるかを次のように述べている。

However hard Razumov tries to persuade himself that he is not guilty of Haldin's death, he cannot suppress the knowledge that the responsibility is his alone. General T- makes it perfectly clear that had Haldin 'not come with his tale to such a staunch and loyal Russian as you, he would have disappeared like a stone in the water.' He cannot even share the blame with

Haldin himself. When he returns to his rooms he discovers that the fugitive is perfectly ready to remove himself (indeed, he does so) as soon as he senses that Razumov does not approve of what he has done. Razumov has never been under any external pressure to betray him to the authorities. *His decision is wholly his own. He is entirely guilty.*² [Italics Mine]

ハルディンは、ラズモフを沈着冷静で思慮深い学生とみなし、万一自分が逮捕されても疑われる可能性の最も少ない人物だから彼に頼ったという。そこには、人間理解のアイロニーがある。しかし、もしラズモフが政府高官暗殺という自分のとった行動を是認しないなら、迷惑をできるだけ最小限にしようとしていた。では、ベアトウーの言う「彼（ラズモフ）の決定は完全に彼自身のものである。彼は全面的に有罪である」とは、どのように解釈すべきだろうか。T-将軍が明言したように、もしラズモフがハルディンに関する情報を密告しなかったら、当局側にとっては水に沈んだ石のように行方が分からなくなった可能性が大であったのだ。ラズモフがT-将軍に会えたのも、父であるK-公爵の地位と紹介によってであった。父親が長司祭の娘と、若き日の過ちともいうべき関係を持ったために生まれたラズモフについて孤独感が強調される。しかし、決定的な瞬間には、ラズモフは父親の社会的地位を利用したことも見落してはなるまい。

このような方針を選択したラズモフは、三年間の勤勉で落ち着いた生活を取り戻そうとするが、彼は既に帝政ロシアの巨大な官僚機構の側の網に触れた人間であり、下宿が警察に早速捜査され、女将は驚愕しラズモフも一層深い不安感に陥る。やがて、内務省官房本部からの通知が届き、出頭したラズモフはミクーリン顧問官の支配力のもとで、スパイとして生きようになる。父親K-公爵の配慮と懇請によりラズモフの名前は全て公式書類から抹消されハルディンに対する尋問でも言及されることはなかった。ベアトウーは次のように言う。

To be sure, Razumov is in complicity with at least three men—his father, General T- and Councillor Mikulin- who do not consider his crime to be one

at all. Moreover, these men erase, even from the most secret archives, all record of his role in the Haldin affair. If life is a public thing, then the fact that no one knows about a crime is almost as if the crime had not been committed at all. But Razumov's private knowledge persists, and it isolates him utterly—both from the autocrats, whom he unconsciously despises, and from the revolutionaries, whom he unconsciously envies.³

ラズモフを裏切りの点から見てゆくと、利己的でおぞましい人物である印象が強いはずである。しかし、読者はラズモフをそのような若者とのみ判断しないであろう。それは苦境に追い込まれていくラズモフに共感を誘う箇所がいくつかあること、ジュネーヴに居住する革命家たちがしばしば戯画的、諷刺的に描かれていることと4部で構成されている小説中の時間の操作が巧みで、第一部以降でラズモフがスパイとして生きていることが分かり難いからである。小説の冒頭で、語り手の語学教師の見たラズモフが「背の高い均整のとれた身体つき」で顔つきにやや柔弱な点があるにしても、「申し分なくすぐれた容貌で、彼の態度も申し分なかった」と述べられている。ラズモフは孤独の影はあるが、人づき合いは悪くない。「彼は常に近づきやすく、彼の生活にはこれといった秘密も、謎めいたことはなかった」。ラズモフは、政治的な熱弁をふるう雄弁な学生たちに対しては、口数の少ない聴き役に徹したので、深みのある信頼できる人物としての評価を高めてしまう。そして、既にふれたようにハルディンが下宿に逃れて来る遠因ともなる。ラズモフの寡黙は、個人の癖ともいえるが、それ以上に自由な意見を持つことが許されない国の非政治的な学生の傾向の反映でもある。

1920年に書かれた「作者の覚え書」には、ラズモフについて次のように書かれている。

Razumov is treated sympathetically. Why should he not be? He is an ordinary young man, with a healthy capacity for work and sane ambitions. He has an average conscience. If he is slightly abnormal it is only in his sensitiveness to his position. Being nobody's child he feels rather more

keenly than another would that he is a Russian—or he is nothing. He is perfectly right in looking on all Russia as his heritage. (p. ix)

ラズモフを「普通の若い男」として共感を持って書いたことが強調されている。彼は精神的、政治的に不穏な時代に生きていることに気づきながらも、日常性の持つ見かけの正常さを本能的に維持し続けようとする。第 部では次のように描かれている。

Razumov was one of those men who, living in a period of mental and political unrest, keep an instinctive hold on normal, practical, everyday life. He was aware of the emotional tension of his time; he even responded to it in an indefinite way. But his main concern was with his work, his studies, and with his own future. (p. 10)

家族との繋がりがないラズモフにとって、ラズモフという名は「孤独な個人の単なるレッテル」にすぎず、彼を社会に結びつけるのはロシアの一臣民という立場である。それ故にラズモフは地位には敏感で枢密顧問官やせめて著名な老教授としての将来を夢見る。平素から学業に励んでいるラズモフは近づく試験にも自信があり、文部省主催の懸賞論文に応募しようとする余裕さえある。

III

別の角度からも、ラズモフは普通の若い男性、見方によれば感心な学生であることが描かれている。そのような人間にもある日思いがけないことが起こって日常的な平穏さが破壊され危機的状況に直面する可能性を読者に思い起こさせ、主人公のラズモフにある程度共感させる仕掛けである。だが、ラズモフが裏切りを働いたこともたしかである。『西欧の眼の下に』には、このようないわば二面性がある。ホーソー(Jeremy Hawthorn) は、結末部分では、ラズモフの裏切りを明確に表すこの小説の完成直前の執筆事情に注目している。すなわち、1907年にコンラッドは『西欧の眼の下に』の執筆を中

断し、短編「秘密の共有者（‘The Secret Sharer’）」を書き上げる。両作品を比較すれば、短編はマイナーな存在だが、主人公が置かれた状況の類似性は著しく、ここに『西欧の眼の下に』の理解を助ける鍵があると言う。

In *The Secret Sharer* the young, inexperienced captain of a ship, waiting to sail on what is, for him, a first voyage command, is confronted by the first mate of another ship who has just killed a fellow sailor, and to whom the captain grants refuge. The captain is thus faced with a situation not dissimilar to that which Razumov is placed in *Under Western Eyes* when he returns home to find Haldin—a self-confessed political assassin—asking for his assistance.⁴

ホーソーンは、ラズモフも逃亡する殺人犯レガットも「大海を泳ぐ魚のように孤独」と描写されること、ラズモフが告白した後、自身を分身のように見る点が「秘密の共有者」の若い船長の心理と酷似していることも指摘する。約二年間にわたり取り組んできた『西欧の眼の下に』を完成するのに困り果てながら、「秘密の共有者」は書かれた。小説の執筆を急ぐように相当の圧力を代理人のピンカー (J. B. Pinker) から受けていたのにもかかわらず、敢えて短編を送った事情は1909年12月4日のピンカー宛の手紙⁵にもうかがわれる。しかも、二年間にわたり執筆に難渋した小説は、その後約1ヶ月半で完成したのだ。ダレスキー (H. M. Daleski) は次のように作家の心理を推論している。

It was then, however, he(Conrad) put the novel aside to write “The Secret Sharer”, which he began towards the end of November 1909 and completed in early December. He thereupon finished *Under Western Eyes*, the typescript of the novel bearing the inscription, ‘End. 22 Jan. 1910 J.C.’⁶

小説を完成するために準備段階として、場所も登場人物も異なる短編を書かねばならなかった心理的必然性がコンラッドにはあったと言えよう。『西欧

の眼の下に』を理解する鍵がありそうである。コンラッドを論ずる際に、作品を「海洋小説」と「政治小説」に分けて批評することがままあるが、むしろ大切なことは、そのような二種類ともみえる作品群をなぜ書いたのか、またそれらに共通する要素は何かを理解することであろう。『西欧の眼の下に』の執筆事情は、このような角度から考察すべき好個の例といえよう。

ラズモフも若い船長も、殺人を犯した男が思いがけなくも助けを求めて来たという点では共通した状況に直面する。しかも、逃げて来た男は、ハルディンは革命のため、レガットは船上の秩序と安全を守る為と、各自は義に基づいてやむなくとった行動だと言う。ハルディンもレガットも次の逃亡の計画を持っていて、相手にできるだけ迷惑を少なくしたいとも思っている。二つの作品が提示する問題をホーソーンは次のように、まとめている。

What are respective claims of self-interest, social duty and common humanity? To whom, or to what, do we owe the first allegiance: to our selves, to our social group or nation, or to the particular claim of another individual who, in extreme circumstances, asks for help?⁷

短編「秘密の共有者」の創作において、コンラッドが行なったことは、上記の問題を考えるのに、彼が慣れ親しんでいた状況に場を移し、条件をいわば単純化したことである。短編の主人公は、初めて船長としての責任をまかされた夕方、次のように感じる。

And suddenly I rejoiced in the great security of the sea as compared with the unrest of the land, in the choice of that untempted life presenting no disquieting problems, invested with an elementary moral beauty by the absolute straightforwardness of its appeal and by the singleness of its purpose.⁸

もちろん、短編の展開は海上の生活がこのように想像したほど確たる安全性を持たず、心を騒がす問題が無いわけではないことをすぐに示す。しかし、

語り手を一人称の「私」にして、作者コンラッドの海上経験がある程度ストレートに反映されて叙述される短編のこの箇所には、コンラッドの陸の生活に対する見方がうかがわれると言ってよかろう。陸は不安で錯綜した問題が多いところである。これに対し海上生活は、目的どおり安全、確実に航海をするという目標が一意専心であること、その絶対的な単純さにより、根源的な倫理的美しさと魅力を帯びる。

初めて指揮をとることの不安をまぎらわすために、船長自身が甲板上での当直をするという慣例破りの行動を始めてすぐに、淡い鱗光のきらめく海面に最初は、「首の無い死体」のようなレガットを発見した瞬間から、若い船長の心理は動揺する。しかし、ラズモフのハルディンに対する対応と著しい対照をなすのは、若い船長はレガットが名乗る声を聞いた瞬間から共通性を感じている経過である。‘The voice was calm and resolute. A good voice. The self-possession of that man had somehow induced a corresponding state in myself.’⁹

断固たる決意を秘めた強い魂を思わせるその声を聞いた時から、船長は謎のような出現者に「不思議な結びつき」を感じる。

I should have gathered from this that he was young But at that time it was pure intuition on my part. A mysterious communication was established already between us two—in the face of the silent, darkened tropical sea. I was young, too; young enough to make no comment.¹⁰

他の船員に気づかれないで狭いL字型の船長室にレガットを匿ってからは、室内の明りでよくみれば船長は外見はレガットと必ずしも似ていないことに気づくが、それにもかかわらず彼を分身のように見做しはじめる。

He was not a bit like me, really; yet, as we stood leaning over my bed-place, whispering side by side... anybody bold enough to open it stealthily would have been treated to the uncanny sight of a double captain with his other self.¹¹

ラズモフのハルディンに対する態度はこれとは大いに異なる。ハルディンがことの経過を相当話した後でも、ラズモフは冷静に話そうと努めながら、次のように言う。「しかし、こう言うては何だが、ヴィクトル・ヴィクトロヴィッチ、ぼくたちは余りよく知らないし、....分からないなどして君が....」(19頁) これに対しハルディンは「信頼感だ」とこたえ、これはラズモフの口をびたっと閉じさせてしまう。この「信頼感 (confidence)」と言う語は、ラズモフの人物像に関して繰り返しアイロニカルに用いられる。

自分は周囲の人々と異なることをつよく意識しながら、周囲の人々から信頼されてしまうラズモフの姿が強調される。この強調点こそが、『西欧の眼の下に』第III部の終わりで、ラズモフがジュネーヴのジャン・ジャック・ルソー島と呼ばれる小島に建つルソー (Jean-Jacques Rousseau) のブロンズ像の影の下で、スパイとしての文書を書く場面にかかわって来る。ルソーは『告白』 (*Confessions*) の中で次のように言う。

わたしひとり。わたしは自分の心を感じている。そして人々を知っている。わたしは自分の見た人々の誰とも同じようには作られていない。現在のいかなる人ともおなじように作られていないとあえて信じている。わたしの方がすぐれていないとしても、少なくとも別の人間である。¹²

批評家ネイジャー (Zdzisław Najder) は、この点をとらえて次のように述べている。

Rousseau's position boils down to this: I am unlike anybody else, and therefore I should be judged by special standards; I am well-intended and sensitive, therefore I cannot do evil. Any amount of the moral principles advocated by Conrad must include the exact opposite of Rousseau's position, and the moral stance of many Conradian heroes represents the antithesis of

Rousseau's peculiar 'great moral lesson'; 'to avoid those situations of life which bring duties into conflict with our interests'. This, Conrad would say, is stark moral cowardice. In his life, Conrad also made compromises; but to proclaim such a programme would, in his eyes, amount to making moral cowardice a norm.¹³

『西欧の眼の下に』の執筆事情はコンラッドにとってこの時期にルソーの思想が強く意識されていたことを示している。ルソーはコンラッドの著作において明白に二回現れる。すなわち、『個人的記録』(A Personal Record)では『告白』と『エミール』(Emile)への言及があり、『西欧の眼の下に』では『社会契約論』(Du Contrat social)への言及があり、ラズモフを見下ろすルソーの像は逃亡者を見つめる逃亡者という象徴性を持つとネイジャーは指摘する。¹⁴

コンラッドの書簡集第4巻をみると、Some Reminiscences という題で The English Review に連載されて、後に『個人的記録』(A Personal Record)として一冊の本にまとめられた回想記の執筆時期は『西欧の眼の下に』の執筆時期と重なり1908年秋には完成したらしい。その背景には、小説の執筆に難渋するコンラッドのいわば気晴らしとしてフォード (Ford Madox Ford) が勧めた事情があり、コンラッドとしても、この回想録は楽しい仕事だったようで、「それがために小説の執筆が一日たりと遅れることはなかった」¹⁵と述べている。

『個人的記録』と『西欧の眼の下に』の執筆時期の重なりとルソーへの関心については、次の点が挙げられる。

- 1) ルソーは1712年にスイスのジュネーヴで誕生、16歳迄すごした。
- 2) ルソーは1728年、16歳の時、ジュネーヴを出奔したが、1754年にジュネーヴの市民権を獲得、1755年から1765年まで住んだ。ジュネーヴに愛情と誇りを持ち、著書の肩書きとして「ジュネーヴの公民」を用いたこともある。
- 3) ルソーの著作は、しばしば禁書、焚書となり、1765年頃からルソーはジュネーヴ政府と不和になり、人々に投石されたりした。ルソーの

生涯には、逃亡者、亡命者の側面がある。

4)ルソーには、『社会契約論』をはじめとして、政治、文明のあり方についての著作がある。

5)ルソーは1772年に『ポーランド統治論』(*Considerations sur le gouvernement de Pologne*)を発表している。¹⁶

『西欧の眼の下に』における重要な部分の場をなぜジュネーヴに設定したかは、ルソーが大いに関係しているといつてよい。また、コンラッドがジュネーヴをよく知っていたことは書簡集であきらかである。1891年5月17日から、前年のアフリカ行きで非常に損なった健康を水治療法で回復するためにジュネーヴ近郊のChampellに滞在し、これをきっかけに94年夏、95年春にも同地へ出かけ治療を受けている。¹⁷ さらに、1907年5月から8月にかけては、自身の悪化した通風、リウマチの治療と病弱な息子ボリス(Borys)の健康回復のために同地へ再び滞在している。¹⁸

コンラッドが当初、“Razumov” という題で、『西欧の眼の下に』の基となる作品の執筆を開始したのが、1907年12月であることを考え合わせると¹⁹、作品を構想するにあたって知悉したジュネーヴの地理、雰囲気につき記憶を新たにすることは、大きな影響を持っていたと推測される。西欧的な市民的自由、民主主義の理想と結びつけて語られることの多いジュネーヴは、また、中立性を標榜する一面で亡命者の街でもある。ロシアに住むことが難しくなったハルディン母娘、ロシアの変革を望むという自称革命家達、彼らを探る使命を帯びて送られたラズモフを一ヶ所に集めて小説を展開するのに、ジュネーヴは格好の場所であった。

V

帝政ロシアの圧政に対して戦う学生が重要な人物として登場する『西欧の眼の下に』において、ジュネーヴの人々に忘れられたかのような小島に建つルソーの銅像がやや諷刺的に描かれる意味は何であろうか。そこには、政治をおぞましいものと思いつつ関心を持たざるをえなかったコンラッドの姿が浮かぶ。ルソーの『社会契約論』には、コンラッドの人間観、政治観からす

れば、余りにも観念的、空理空論的な箇所がある。

いかなる人間もその仲間にたいして自然的な権威をもつものではなく、また、力はいかなる権利をも生みだすものでない以上、人間のあいだの正当なすべての権威の基礎としては、約束だけがのこることになる。²⁰

人民は、自分を王にあたえることができる、とグロチウスはいう。....人民は、自分を王にあたえる前に、まず人民であるわけだ。この贈与行為そのものが、市民としての行為なのだ。それは公衆の議決を前提としている。....多数法の法則は、それ自身、約束によってうちたてられてものであり、また少なくとも一度だけは、全員一致があったことを前提とするものである。(『社会契約論』28頁)

なぜなら、個々人の利害の対立が社会の設立を必要としたとすれば、その設立を可能なものとしたのは、この同じ個々人の利益の一致だからだ。....そして、すべての利益がそこでは一致するような、何らかの点がないとすれば、どんな社会も、おそらく存在できないだろう。ところが、社会は、もっぱらこの共通の利害にもとづいて、治められなければならないのである。(『社会契約論』42頁)

コンラッドも、社会は「個々人の利益の一致」のため、「さまざまな利害の中にある共通なもの」のために存在すべきと思っただろうが、「正当なすべての権威の基礎」に「約束」があるとか、過去のある時点で「少なくとも一度だけは、全員一致があった」とする「前提」や、王の力は「公衆の議決を前提」とした市民の「贈与行為」によるといった論の進め方は、同意できなかっただろう。

コンラッドには、ルソーのような「契約」によって社会が成り立っているとは思えなかった。無論、ルソーとても契約によって成り立つのは、近代的な市民社会のみと論じているようで、統治形態は時代により、国により様々

であることは『社会契約論』の第三編で述べている。だが、コンラッドは契約の概念や人間の合理性についてより懐疑的であった。『西欧の眼の下に』においてジュネーヴを「見苦しくはないが優雅さを欠き、歓迎の手をさしのべるが同情を示さないこの小都市」(141頁)と描写し、自らの運命を「掌にほとんど収まりそうな小共和国の民主的諸制度の完全なメカニズムによって揺りかごから墓場まで守られている」と思い込んでいるような、「ぼつねん」としたスイス人夫婦」の姿を書き込んだコンラッドは西欧の民主政治にもさまざまな価値と側面があると認識し、そのある部分には軽侮の念を持っていたことを反映している。

コンラッドによれば、ルソーが相対的によしとする近代的で、民主的とみなされる社会も実に不安定なもので、その中で個々人は通常は砂粒のようにバラバラに生きている。しかも、孤立しているようで、思いがけぬ糸で結ばれて相互に運命的な影響を与えることは、既に『密偵』(*The Secret Agent*)でも強調されている。

しかし、コンラッドはルソーとは異なる人間の結びつき方があると信じていた。それもまた、長い船上での経験によるものであろう。航海に出発する船には、実に様々に異なった背景を持つ船員と乗客が乗り込んで来る。彼らに唯一つ共通することは、目的の港まで安全に、できるだけ予定どおりに航海することである。それは、一時的でしかないが、きわめて具体的な共通の目的である。この目的を達成するために、船長を頂点とする秩序によって一等航海士以下は職責を果たさねばならないという職業倫理はコンラッドに骨の髄まで染み込んだ。彼は、陸における一般的な人間同士の信義、信頼について考える際も、この立場から判断する傾向がある。これは、コンラッドについて多くの批評家が指摘する「人間の根源的連帯 (solidarity)」と深く関係する。²¹

『西欧の眼の下に』の完成に難渋していた時、貴重な時間を費やして「秘密の共有者」を書き上げたことは、それ以前には、まったく見知らなかった者の間でも、ひとたび信頼、共通の絆が生まれたら守るべきだということをコンラッドが再確認するためには有効であった。この再確認された価値観は、ラズモフが自分に言い聞かせる、ヴィクトール・ハルディンとの間には「共

通の信念、共通の確信」の絆が無いから裏切りではないとする立場を自己弁護、言い訳であるとする。²² 小説の結末近くでのラズモフの告白もこの立場から検討する必要があり、またドストエーフスキイ(Feodor Dostoevski)の『罪と罰』との比較も解釈には有効と思われる。²³

ラズモフはコンラッドの多くの主人公と同様に、急にある状況に陥れられる。しかし、それは単にコンラッドの作風の繰り返し以上に、『罪と罰』のラスコーリニコフを意識し反発したものである。ラスコーリニコフは、不意に苦境に陥るといふより、自らの理屈によってそれをひきおこしてしまう。すなわち、貧富の差に対する憤りという普遍的な理由を基点として、多くの人々を死に至らしめても歴史に名を残すナポレオンのような「非常人」は素材にすぎないような「常人」とは異なると考えて、自らを前者の一員とみなし²⁴ 金貸しの老婆を殺し、計算違いでその妹リザヴェータをも殺す。また、その後のラスコーリニコフの母、妹との関係、頻出する喧騒にみちた酒場の場面、ラスコーリニコフが家族のために自己犠牲に徹したソーニャにうたれ、遂にはキリスト教によって救われる過程は、コンラッドにとって余りにもドストエーフスキイ的ロシアで違和感、反発を招くものだったに違いない。

ラズモフは、ラスコーリニコフのように自らの理屈によって殺人を犯すのではない。発端はひどくロシア的である。思いがけなくも政府高官ド・P氏を暗殺したハルディンが下宿に逃げ込んで来たことから物語は展開する。また、第一部に描かれる能吏であったミクーリン顧問官の失脚、ハルディンが「輝けるロシア民衆の魂」ととらえたジーミアニッチは酒好きで女たらしで警察に密告した過去があるらしいという噂等、帝政ロシアの独裁制の影がつきまとう。

しかし、ラズモフが告白へ至る過程には、ロシア独特の要素は希薄であり、むしろ普遍的な人間性に基づいている。ハルディンは官憲の過酷な拷問の間にも一言もラズモフについてふれなかったし、ジーミアニッチさえ「後悔」した後、自殺したことが、ソフィア・アントノブナが受け取った手紙で分かる。父K公爵への配慮により、ラズモフの名はあらゆる秘密の公文書にも記されていないことを考えれば、今や、ラズモフはもっとも安全になった。だが、その時にこそ、ラズモフは自らの人生が秘密と嘘で塗り込められたも

のであることを痛切に感じる。ここには、帝政ロシアの独裁制の下で、いかに個人の自由が少ないとはいえ、ハルディンを裏切ったのは自らの意思によるという自責の念が募る。読者がラズモフにある程度の悲劇的な高潔さを感じるのは、この故であろう。彼は自由に吸える「空気」を欲した。既にヴィクトール・ハルディンから聞いていたナターリアの「信頼にみちた眼」も、ラズモフを次第に苦しめていった。

スパイとしての最初で最後の報告書を送った後、このような生活をもはや続けることはできないと感じたラズモフは、遂にナターリアに事実を告白する。その後で、ラズモフがジュリアス・ラスパラの家で開かれていた革命家達の集まっていた会でする告白はニキータらによるリンチを招き、不要な行為ともみられるが、ラズモフの心理としては決着をつけたかったのである。

『西欧の眼の下に』を理解する重要な鍵は、この告白はあくまで人間的なレベルにとどまる点である。告白はヴィクトールの母の死を早めたし、ナターリアに激しい衝撃、これ以上に無い不幸を味わわせる。ここにも、コンラッドの『罪と罰』への反発がみられる。それは、キリスト教に総じて反感を持っていた作家の立場の反映であり、とりわけロシアでは国家権力と教会は結びついて人々を圧迫するものでしかないと言う見方のあらわれである。第

部の初めでハルディン夫人に「ロシアでは、教会は圧制と同一視されるもの」(103頁)と言わせている。ネイジャーはラズモフが、はっきりとした忘れられない個性を持つが、同時に‘the son of a prince and an Archipriest’s daughter’である彼は‘an offspring of Power and Orthodoxy’として象徴的な人物であり、このことから‘Russia’s immensity as a whole’に帰属意識を持つのだと指摘する。²⁵

小説の終り近くで、不自由な身体となったラズモフは「よきサマリア人」とあだ名されるテクラによって世話をされていることがソフィア・アントノヴァによって語り手の語学教師に伝えられるが、テクラには苦しんでいる人に無私の献身をする真の友という以上の宗教的意味は薄い。

最後に、『西欧の眼の下で』でよく問題とされる語り手の語学教師についてふれておきたい。両親がいわば帝政ロシアの圧制によって殺された生い立ちをもつコンラッドにとって、ロシアについて冷静に書くことは困難であっ

た。作家生活にあって、ロシアについてふれることは慎重に回避されていた。この困難さは『西欧の眼の下に』の「作者覚書」にも次のようにうかがわれる。‘I had never been called before to a greater effort of detachment: detachment from all passions, prejudices and even from personal memories.’ (p.viii)

日露戦争で思いがけなくも大国ロシアが敗北した直後の1905年7月に *Fortnightly Review* に発表した ‘Autocracy and War’ には、評論という性格もあり、ロシア批判が直接的に激越な論調で述べられている。²⁶ しかし、小説として『西欧の眼の下に』を成り立たせるためには、一種の中立性が必要であり、たとえロシアとロシア人を全体としては批判的、軽蔑的に描くとしても、存在感、リアリティーを保ち、少なくとも何人かの登場人物には読者の共感を誘うことも必要である。親の仕事の関係でペテルスブルグで生まれ9才までそこで育ち、後にロシア語を学びなおした語り手の語学教師は、ロシア語で書かれたラズモフの日記の類と手紙を基に物語の大部分を構成するためにも、ジュネーヴの小ロシア地区にかなり広い人脈を持つことにより、さらに物語を展開する上でも、題材に対する心理的緩衝としても、コンラッドにとって「彼は私に役に立った」ことであろう。このような語り手を用いたことにより、作品発表後9年経過して書かれた「作者覚書」にあるように作家としての責務と感じた「細心な不偏不党の調子」や「完全な公正」(viii頁)が達成されているかについては議論もあろう。『西欧の眼の下に』には、語り手が存在しないも同然の部分もあれば、不器用さが感じられる箇所もある。一方において、語り手の語学教師を高く評価する批評家もいる。²⁷ 結局、『西欧の眼の下に』を味読する鍵は、語り手の視野の限界や偏りを考慮に入れつつも、外国人の方が異なる文化の特質をよりはっきりと照らし出すことがありうることを認めることと、「ロシアでは」という表現が繰り返されることにより、出来事と状況の特殊性を強調しながらも人間の普遍性を追求した作品であると気づくことであろう。

注

- 1 Joseph Conrad, *Under Western Eyes* ('Dent's Collected Edition'; London: J. M. Dent & Sons., 1963), pp. 37-38.以下、このテキストからの引用は、頁数のみを括弧内に示す。本論文中における *Under Western Eyes* の翻訳は拙訳。ただし、篠田一士訳『西欧の眼の下に』(集英社、1970)、水島正路訳『西欧の眼のもとに』(思潮社、1967)、中島賢二訳『西欧人の眼に』(岩波文庫、1991)の訳を適宜参照した。
- 2 Jacques Berthoud, *Joseph Conrad: The Major Phase* (Cambridge: Cambridge University Press, 1978), p. 177.
- 3 *Ibid.*, p. 179.
- 4 Jeremy Hawthorn, Introduction to *Under Western Eyes* ('The World Classics'; Oxford: Oxford University Press, 1983), p. vii.
- 5 Frederick R. Karl and Lawrence Davies (eds.), *The Collected Letters of Joseph Conrad* vol.4. 1908-1911 (Cambridge: Cambridge University Press, 1990), pp. 297-299.
- 6 H. M. Daleski, *Joseph Conrad: The Way of Dispossession* (London: Faber and Faber, 1977), p. 171.
- 7 Jeremy Hawthorn, Introduction to *Under Western Eyes*, p. vii.
- 8 Joseph Conrad, 'The Secret Sharer', in *'Twixt Land and Sea: Three Tales* ('Dent's Collected Edition'; London: J. M. Dent and Sons, 1966), p. 96.
- 9 *Ibid.*, p. 99.
- 10 *Ibid.*, p. 99.
- 11 *Ibid.*, p. 105.
- 12 ジャン・ジャック・ルソー (Jean-Jacques Rousseau), 桑原武夫訳『告白 (*Confessions*)』上、第一部第一巻、(岩波文庫、1965年) 10頁。
- 13 Zdzisław Najder, *Conrad in Perspective: Essays on Art and Fidelity*, (Cambridge: Cambridge University Press., 1997), p. 142.
- 14 *Ibid.*, p. 141.
- 15 Frederick R. Karl and Lawrence Davies (eds.), *The Collected Letters of Joseph Conrad* vol.4. 1908—1911 (Cambridge: Cambridge University Press., 1990), pp. 124-126. 1908年9月18日付の J. B. Pinker 宛の手紙他。ただし、Zdzisław Najder は、*A Personal Record* の執筆の動機には単に Ford の勧めだけでなく、短編集 *A Set of Six* に関する Robert Lynd の書評に対する反発、また、それ以前からあった、有名なポーランドの作家 Eliza Orzeszkowa らによる、コンラッドは困難なポーランドを捨て去ってイギリスを選んだという繰り返される非難への反発があると論じている。Zdzisław Najder, *Conrad in Perspective*, pp. 102-104. Zdzisław Najder ed. translated by

Halina Carrol-Nadger, *Conrad under Familiar Eyes* (Cambridge: Cambridge University Press., 1983) pp.ixx. pp. 182-192. Jocelyn Baines, *Joseph Conrad: A Critical Biography* (London: Weidenfeld and Nicolson, 1969), p. 353.

- 16 平岡昇, 「ルソーの思想と作品」, 年譜、平岡昇編、『“世界の名著”ルソー』, (中央公論社、1982年), 『ポーランド統治論』の内容は、コンラッドに反発を感じさせたものであったろうことは、Z. Nadgerの指摘から推測される。 *Conrad in Perspective*, p. 33. note 17 Frederick Richard Karl and Lawrence Davies (eds.), *The Collected Letters of Joseph Conrad*, Vol. 1 1861—1897 (Cambridge: Cambridge University Press, 1983), pp. 77—82. pp. 166—172. pp. 213—222. Marguerita Poradowska 宛の手紙はほとんどが Champel, Geneva から発信されている。 p.216. Edward Garnett 宛の書簡。 p.212 and p.219. T. Fisher Unwin 宛の書簡。
- 18 Frederick Richard Karl and Lawrence Davies (eds.), *The Collected Letters of Joseph Conrad*, Vol. 3 1903-1907 (Cambridge: Cambridge University Press, 1988), pp. 435-454. pp. 438-464. 1907年5月6日～7月17日の間の John Galsworthy 宛の手紙。5月18日～8月5日の期間中の J. B. Pinker 宛の手紙等参照。
- 19 *Ibid.*, pp.515-517. 1907年12月4日～30日の間に J. B. Pinker へ宛てた3通の手紙。
- 20 ジャン・ジャック・ルソー、桑原武夫・前川貞次郎訳、『社会契約論』(“岩波文庫”; 岩波書店、1954年) 20-21頁。以下、この本からの引用は括弧内に書名と頁数で示す。
- 21 特に次の二人の批評家は『西欧の眼の下に』をコンラッドの他の作品と‘solidarity’の概念で共通性を持つと論じている。
Jacques Berthoud, *Joseph Conrad*, p. 171. Morton Dauwen Zable, ‘Introduction to *Under Western Eyes*’ in *Conrad: A Collection of Critical Essays*, ed. Marvin Mudrick, (‘Twentieth Century Views’; Englewood Cliffs, N.J.: Prentice-Hall, 1966), pp.111-144.
- 22 Zdzisław Nadger はコンラッドの作品には、二種類の告白があり、一つは重要な、あるいは苦痛に満ちた経験を友人などに率直に告白することにより「魂の重荷を除く」もので、もう一種類は、自己弁護的であり、自らの状況の例外的性質を述べるとし、『西欧の眼の下に』のラズモフの告白を挙げている。後者はルソーの『告白』に対する批判を含んでいるとする。 Z. Nadger, *Conrad in Perspective*, pp. 142-143. 参照、Joseph Conrad, *A Personal Record: Some Reminiscences* (‘The Works of Joseph Conrad’ London: William Heinemann, 1919), pp. 118-119.
- 23 『西欧の眼の下に』と『罪と罰』を比較した論は多いが、小論では特に次の4点を参考にした。Andrzej Busza, ‘Rhetoric and Ideology in *Under Western Eyes*,’ *Joseph Conrad: A Commemoration*, ed. Norman Sherry, (London: Macmillan, 1976), pp. 105-118. Jeremy Hawthorn, Introduction to *Under Western Eyes*, Irving Howe, chapter 4

- ‘Conrad: Order and Anarchy’ *Politics and the Novel*, (Greenwich, Conn.: Fawcett Publications, Inc., 1967), pp. 79-115. Zdzislaw Nadjer, chapter 10 “Conrad, Russia and Dostoevsky” *Conrad in Perspective*, pp. 119-138.
- 24 ドストエーフスキイ、中村白葉訳『罪と罰』（“岩波文庫”；岩波書店、1974年）、第二巻201-205頁、第三巻249-250頁。
- 25 Zdzisław Nadjer, *Conrad in Perspective*, p. 131.
- 26 Joseph Conrad, ‘Autocracy and War,’ *Notes on Life and Letters* (‘Collected Edition of the Works of Joseph Conrad’ London: J. M. Dent and Sons, 1949), pp. 83-114.
- 27 語り手の老語学教師を ‘defender of rationality’ と高く評価したもの。Jacques Berthoud, *Joseph Conrad*, p.164. ヒューマニズム、個人的人間関係、私的なものの価値と言う観点から語り手を高く評価したもの。Daniel R. Schwarz, chapter 10 ‘Affirming personal values: The significance of the language teacher in *Under Western Eyes*’ *Conrad: Almayor’s Folly to Under Western Eyes* (London: Macmillan, 1980), pp. 195-211. Albert Guerardは、『西欧の眼の下』では『密偵』に比べると ‘technical boundaries’ は余り課されていないが、なお ‘momentary impressions of clumsiness’ が感じられる。しかし、それは小さな欠点で全体としては成功した小説と高く評価する。Albert Guerard, *Conrad The Novelist* (Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1966), pp.248-249. 近年の批評には、コンラッド、語り手の語学教師、ラズモフの関係をフィクション、言語、書くという行為の面から考察するメタ・フィクション論が目立つ。例として、Penn R. Szitty, ‘Metafiction: The Double Narration in *Under Western Eyes*,’ *Critical Essays on Joseph Conrad*, ed. Ted Billy, (Boston, Mass.: G. K. Hall & Co., 1987), pp. 142-162. Keith Carabine, chapter 7 ‘Under Western Eyes,’ *The Cambridge Companion to Joseph Conrad*, ed. J. H. Stape, (Cambridge: Cambridge University Press, 1996), pp. 122-139.

In what sense did Razumov betray Haldin?
— On *Under Western Eyes* with reference to
The Social Contract and *Crime and Punishment*—

Toshimasa OSHIMOTO

Key words: betrayal, confession, solidarity, *The Social Contract*, *Crime and Punishment*

Usually it is interpreted that in the last part of *Under Western Eyes*

Razumov lives his life with a sense of remorse concerning his betrayal of Haldin. But to understand *Under Western Eyes* as a whole it is necessary to ask whether Razumov is guilty or not, and if he is, in what sense. For it seemed to Razumov the fact that Victor Haldin, a radical student, an assassin of a high czarist government official, took refuge in his rooms of the lodging was an accident.

Haldin was not his close friend. Until the unexpected event happened, he had spent his life as an industrious student, having a vague hope of success for his future in Czarist Russia.

Feeling his future shattered by Haldin, Razumov was much annoyed and disturbed. Razumov went out and walked around St. Petersburg, under the occasional snowflakes, to seek Ziemianitch, a driver, to inform him of the time and place for Haldin's escape. But Ziemianitch, very drunk and sprawled sleeping in the stable, was far from 'a bright spirit! a hardy soul' described by Haldin, and it made Razumov furious with 'the blind rage of self-preservation.' He showered a rain of blows on Ziemianitch with a stablefork.

When Razumov lingered in the streets wondering what to do, he saw the hallucination of Haldin on the snow across his path. After a few moments' hesitation, he walked 'over the place where the breast of the phantom had been lying.' Then he seemed to make up his mind, 'I shall give him up.' He made an excuse to himself, 'by what bond of common faith, of common conviction, am I obliged to let that fanatical idiot drag me down with him? On the contrary—every obligation of true courage is the other way.' *Under Western Eyes* as a whole is a novel which tries to answer the question in the first sentence of the excerpt and to examine the self-deceiving attitude in the second.

After that scene Razumov went to Prince K-'s (his father's) house, and was introduced to General T- and Councillor Mikulin in turn. Thus the process of his betrayal started. The text contains these sentences: 'Indeed it

could hardly be called a decision. He had simply discovered what he had meant to do all along.' Attentive reading reveals Razumov's betrayal clearly. The reader of the novel, however, might feel some sympathy towards him because of the author's very skillful technique of time shift and characterization. In spite of this, he finally admits that he is guilty and makes confession.

This paper concentrates its argument on the scene where the statue of Jean-Jacques Rousseau watches over Razumov writing his first and last spy report on a small island named after the philosopher. The ironical description of the statue implies Conrad's critical views against Rousseau's concept of 'social contract' and 'confession'.

The writing process of *Under Western Eyes* sheds light on Conrad's reaction against the widespread influence of Rousseau. During the two years in which Conrad struggled with completing *Under Western Eyes* he also wrote the autobiographical essays *Some Reminiscences* for *English Review* from December 1908 to June 1909, which were later published as a book under the title *A Personal Record* in 1912. In this autobiographical work Conrad passes severe judgement on Rousseau because of the philosopher's self-opinionated concepts of confession and human relationship. For Conrad, Rousseau seems to regard himself as an exceptional man among human beings. This attitude resembles to some extent that of Razumov in *Under Western Eyes*.

Conrad put aside the manuscript of *Under Western Eyes* in November 1907 and started writing a short story 'The Secret Sharer' completing it in December. Why did Conrad, who had been pressed by his literary agent J. B. Pinker, do this when he was having great difficulty in completing *Under Western Eyes*? Moreover, Conrad seemed to finish the novel quite smoothly within a few weeks after completing the short story. This process suggests some thematic connection between the two works.

Both *Under Western Eyes* and 'The Secret Sharer' have plots in which a

young protagonist faces the problem that a fugitive, an assassin asks his help to escape. Each fugitive has righteous cause for what he has done. But Razumov's response to Haldin and a young captain's to Leggat are quite different. Conrad rejects Razumov's idea that what he has done to Haldin is not a betrayal, because no bond of common faith or common conviction exists between them. This reasoning of Razumov is close to Rousseau's concept of 'contract'. From Conrad's point of view, what Razumov has done is a breach of 'solidarity'.

Finally it is important to note that moral problems are dealt with on merely human level in *Under Western Eyes*. The divine or the supernatural plays no part in the novel. This is the reflection of Conrad's hate for Christianity, especially Russian Orthodoxy, and his disgust at Dostoevsky's *Crime and Punishment*.